

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K19155

研究課題名(和文)医学生の学習活動における動機づけと自己意識との関係性の調査

研究課題名(英文)The study of the relationship between motivation and self-consciousness in learning activities of medical students

研究代表者

飯田 洋(IIDA, HIROSHI)

横浜市立大学・医学部・講師

研究者番号：80600204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：自己効力感というのは、難しい問題から学習者が何かを学習する際、学習者自らが評価する精神的努力と達成感とに強く関連している。このことは将来医師となり様々な患者と接し、難しい臨床的問題と直面する医学生に大変重要である。今回、我々は医学生の学習意欲度、疲労度、学習目標志向度、自己肯定感の程度、自己効力感の程度、自己意識の程度を、性差・学年による違いを明らかにすべく、医学生76名、初期臨床研修医33名に対してアンケート調査を行った。医学生3,4年生で学習意欲が他学年に比較して低下傾向であることがわかった。また学習意欲と自己肯定感が相関する傾向にあった。男女による性差では有意な差はなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医学部は6年間と他学部と比較し2年間長い。医学生達が入学時に皆持っている医学への真摯な情熱を、教育者側としていかに維持し続けるかという問題について調査し、対処法を検討したいという思いから、本研究を行った。

本研究はこれまで不十分であった医学生における動機づけと自己意識との関係性の解明に貢献すべく、アンケート調査を行った。医学生3,4年生で学習意欲が他学年に比較して低下傾向であることがわかった。また学習意欲と自己肯定感が相関する傾向にあった。男女による性差では有意な差はなかったことがわかった。調査結果を今後の医師養成の医学教育プログラムに応用できる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Self-efficacy is strongly related to the mental effort and the sense of accomplishment that the learner himself evaluates when he learns something from a difficult problem. This is very important for medical students who will become medical doctors in the future and come into contact with various patients and face difficult clinical problems. We surveyed the differences among medical students learning motivation, fatigue, learning goal orientation, self-affirmation, self-efficacy, and self-consciousness. It was found that in the 3rd and 4th year medical students, the willingness to learn was lower than in other grades. Moreover, there was a tendency for the willingness to learn and the self-affirmation to be correlated. There was no significant difference in sex between men and women.

研究分野：医学教育

キーワード：自己肯定感 学習意欲 動機づけ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

医学部は6年間と他学部と比較し2年間長い。多くは共通教養2年、臨床医学2年、病棟実習2年のカリキュラムである。近年、医学部で教えなければならない医学知識の急激な膨張に対して、共通教養が短くなり、病棟実習期間が長くなっている。

私は大学の教員、医師として様々な学年の医学生や臨床研修医と話をする機会を多く持っている。話を聞くと、2年生などは「入学当初はやる気に満ち溢れていたが、医学に関連の薄い講義ばかりでやる気がだんだん落ちてきてしまった」、5年生などは「病棟実習が始まってやる気、責任感が出てきた。しかし3,4年生はこの勉強が何に繋がるかがわかりにくく、やる気が出なかった」などという話を良く聞かれる。医学生達が入学時に皆持っている医学への真摯な情熱を、いかに維持させ続けるかという問題は、医学教育にかかわる者にとって永遠の課題であり、とても重要な課題でもある。

学習に関する動機づけは、通常2つに区分され、「褒められるから勉強する」のような本人以外の外的な要因や条件で誘発されるものを外発的動機づけ、「面白いから勉強する」のような自分自身の内的な要因や条件で誘発されるものを内発的動機づけといい、どちらも教育現場において重要な動機づけの様式である。

動機づけの強さが高いと遂行効率も徐々に高まっていく (Atkinson et al. 1967)。しかし、さらに動機づけの強さが高くなって、ある臨界点を超えると、遂行効率はそれ以上高まらず、逆に徐々に低下するという (Atkinson et al. 1967)。また知的能力が学業成績に反映されるには、知的能力の個人差に応じた動機づけの水準を考慮の必要があると指摘されており、動機づけと学習の関係は非常に複雑である。

学生は主に教育を通して、自らの学力面での自己概念を獲得する Gardner のいう自己教育という目標が実現されるためには、学校において知的技能以上のことを教えなければならない (Gender et al. 1963)。そこでの自己効力感というのは、難しい問題から生徒が何かを学習する際、生徒自ら評価する精神的努力と達成感とに強く関連している。このことは将来医師となり様々な難しい問題と直面する医学部生にとって、大変重要である。

教育学部において、戸倉 (Tokura et al., 2011) らが、自己意識が学習の動機付けにどのような影響を与えているかを報告しているが、医学生を対象とした調査は本邦ではない。

2. 研究の目的

今回、我々は医学生が言う「やる気」を動機づけと自己意識に置き換えて調査し、内発的-外発的動機尺度の下位尺度である 知的好奇心、達成、挑戦、因果律、帰属、楽しさのうち、どの下位尺度による影響を多く受けるか、またその下位尺度と自己意識との関係を、性差・学年による違いを明らかにすることを目的とする。特に医師にとって、知識・技術・態度が重要であり、医学生も同様である。

また、文部科学省は、医学生が卒業までに最低限履修すべき教育内容をまとめた「医学教育モデル・コア・カリキュラム - 教育内容プログラム - 」を定めている。しかし、医学生の学習活動における動機づけと自己意識とのメカニズム解明が不十分なまま、各大学で医学教育プログラムが組み立てられているのが現状である。本研究はこれまで不十分であった医学生における動機づけと自己意識との関係性の解明に貢献するべく、アンケート調査から始め、それを医学教育プログラムとの関係調査に応用することを目的とする。

3. 研究の方法

我々は医学生の 学習意欲度、疲労度、学習目標志向度、自己肯定感の程度、自己効力感の程度、自己意識の程度を、性差・学年による違いを明らかにすべく、研究の同意が得られたのべ医学生 76 名、初期臨床研修医 33 名に対して以下のアンケート調査を行った。以下の尺度を含む調査票を用いた。

内発的-外発的動機づけ尺度 (桜井・高野, 1985): 学習意欲度を測定。

チャルダの疲労スケール (Chalder, 1993): 疲労度を測定。

学習目標志向度 (谷島・新井, 1994): 学習目標志向度を測定。

自己肯定意識尺度 (平石, 1990): 自己肯定感の程度を測定。

特性的自己効力感尺度 (成田ら, 1995): 自己効力感の程度を測定。

自己意識尺度 (菅原, 1984): 自己意識の程度を測定。

4. 研究成果

2015~2019年度にかけて、のべ医学生 76 名、初期臨床研修医 33 名にアンケート調査を行った。結果を解析すると、医学生 3,4 年生で学習意欲が他学年に比較して低下傾向であった。医学部教員として持っている肌感覚と一致していた。しかし、4年以上経過を追えた 8 名で検討すると、3,4 年生での有意な低下を認めなかった。学習意欲自体の個人差が大きい可能性が示唆された。

学習意欲は、医学生と初期臨床研修医との間に差はなかった。しかし、疲労度については、初期臨床研修医は医学生に比較して、疲労度が高かった。2004 年から始まった臨床研修必修化により研修医の待遇は改善されたが、疲労度は学生に比較すると高いことが示された。学生に比較すると高いことは当然なのかも知れないが、厚生労働省の調べでは臨床研修の中断・未修了者が

1.2%（中断理由としてメンタルヘルスの割合が最も高い）いることより、疲労度に対する配慮がより必要であることが示唆される。

学習意欲と自己肯定感が相関する傾向にあった。自己効力感というのは、難しい問題から学習者が何かを学習する際、学習者自らが評価する精神的努力と達成感とに強く関連しているとする Gender らの報告と同様であると考えられる。

医学生、初期臨床研修医とも男女による性差では有意な差はなかった。

自己効力感というのは、難しい問題から学習者が何かを学習する際、学習者自らが評価する精神的努力と達成感とに強く関連している。このことは将来医師となり様々な患者と接し、難しい臨床的問題と直面する医学生にとって、大変重要である。

今回の研究結果をもとに、医学生達が入学時に皆持っている医学への真摯な情熱をいかに維持続けさせるかという問題を、教育者として解決できるよう、教育プログラムをより良いものにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 飯田 洋, 岩田悠里, 藤田浩司, 日下部明彦, 太田光泰, 西巻 滋, 稲森正彦
2. 発表標題 医学部1年生に対する早期医療体験実習の学習者評価に関する検討
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 3飯田洋, 岩田悠里, 藤田浩司, 日下部明彦, 太田光泰, 西巻滋, 稲森正彦
2. 発表標題 医学部新入生に対する多職種連携への理解を深める試み
3. 学会等名 第50回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田 洋, 稲森 正彦
2. 発表標題 機能性ディスぺシアとGERD合併患者に対する治療戦略の検討
3. 学会等名 第55回日本臨床生理学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田洋
2. 発表標題 医療系新入生に対する多職種連携への理解を深める試み
3. 学会等名 第49回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯田洋
2. 発表標題 卒前教育として消化器内視鏡教育を行う意義と工夫に関する検討
3. 学会等名 第48回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 飯田洋
2. 発表標題 卒前教育として消化器内視鏡教育を行う意義と工夫に関する検討
3. 学会等名 第47回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 稲森正彦、飯田洋	4. 発行年 2015年
2. 出版社 メジカルレビュー社	5. 総ページ数 301
3. 書名 意外と知らないくすりのTIPS	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----